

外部評価報告書を提出しました

2006年度に次いで2回目の外部評価を完了し、先月大学に報告書を提出いたしました。

九州大学総合研究博物館のここ5年間の全活動について、外部の評価委員からあらゆる角度から厳しく正鵠を得たご指摘や改善への示唆、さらに躊躇することなく進むべき方向と館員が忘れてはならない博物館の多義的であるが表層に流れないマインドについて多くの課題と期待をいただきました。

これらは、博物館が今日の大学の果たす役割において重要なポジションにいることを、外部から改めて気付かせていただいたことに他ならなりません。

博物館が大学の活性化の中心であることを自覚して、さらに邁進する所存です。

九州大学総合研究博物館館長 竹田 仰

外部評価報告「序」より

博物館の未来を創造するために挑戦し続ける責任が、九州大学総合研究博物館には厳然と存在する。行き着いた感のある高度技術文明と、数値によって人間を評価し続ける閉塞した社会と、自らの存在意義の説明を経済性合理性のみに依存し始めた大学群。こうした現実には苛まれる学術文化が、人類の幸福な未来に貢献しようとするならば、九州大学総合研究博物館は、つねにその核心に位置し、先頭を走る存在でなければならない。すなわち、館が省みる自らの足跡といま構築すべき未来像は、あまりにも大きな責務を含み、無限の可能性を秘めたものとなる。

外部評価委員会は、自らの責任のあり方を人類の幸福に向けた館の創造的構築を支えられるか否かに据えた。今次、大学部局の評価なるものは、デフレーション経営への合致度に盲従した二重三重にくり返される惰性の産物と化しているケ

ースが少なくない。本委員会はこうした疲弊した評価を克服し、九州大学総合研究博物館が、いかにして文化の担い手として高度で、深く、新しく、そして人々の心を学に導く力強いものとなり得ているかどうかを、人間臭く評価することに傾注した。

委員会メンバーは、市民、報道、経済界、学生、博物館人、教育者、研究者と可能な限り多角的な人材より構築されているが、同時に、民主主義の名に隠された衆愚や利益代表の混在を拒否し、真に、国民、市民とともに歩む「学」の新しい姿を、館に求める姿勢を貫いた。評価の対象とした項目・内容は、総務、経営、研究、教育、社会貢献、将来構想など全般に及んでいる。総合性、比較性を科学哲学にもつ博物館は一義的に目的を集約特化させることではその責任を果たすことができない。よってそれぞれの評価対象に対する評価の議論のなかみは、丁寧に緻密でなければならないと考えて、詳細にわたる評価を実施した。

報告書は、委員を中心に唱えられた評価意見を不用意にまとめることなく、できるだけ生の起案を読める形でまとめている。簡略さを求めるよりも大部になることをためらわなかった。その結果、価値観が多彩で結果が即時性を備えるとは限らない博物館運営への進言と批判を、現在とりうる評価体系の中で、最大限目に見える形で残すことができたと確信している。多岐にわたる深奥な議論の数々について、委員会として無理に議論を収束されることはせず、熱意にあふれた委員の主張を大量に盛りこんだことが、館の未来の一助につながることを願う。本委員会の微々たる試みが、九州大学総合研究博物館の真に意義ある歩みに結実することを祈念する。

九州大学総合研究博物館
外部評価委員会委員長

遠藤 秀紀

東京大学総合研究博物館教授

Close-up Event & Exhibition

催事・展示クローズアップ

九州大学創立百周年記念・九州大学総合研究博物館特別企画

「Breathing - 旧工学部機械実習工場空間展示」

担当：三島 美佐子 開示研究系・准教授

総合研究博物館が所有する資料のうち、医科大学時代から教育用に購入された骨格標本や、九大設立当時に購入された歴史的工作機械を組み合わせ、元岡への移転直前まで使われていた旧工学部実習工場（現・第一分館倉庫）での空間展示を実施しました。昨年5月からコラボレートしている服飾デザイナー大鶴憲吾氏による空間アレンジは、これまでの九大博になかった感性的な展示を実現しており、多くの皆さんの心をとらえました。また大鶴さんの提案により、オープニングに、アコーディオンとコントラバスのユニットmama!milkのコンサートや、FLAT HOUSEのアラタ・クールハンド氏のトークライブなどを組み合わせ、彩り豊かな企画となりました。

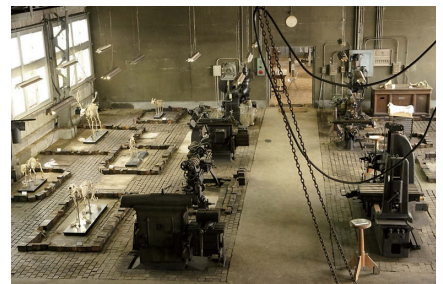
展示をとおして興味深かったのは、来場される方によって観覧の仕方が大きく違っていた事です。年配の男性の多くはまず機械にまっしぐら、しばらくしてから骨がある事に気づき「何でここに骨がある?」。逆に女性の場合は、まず骨から入り、展示全体をかみしめるように見て回られる方が多かったようです。また、理工系がご専門とおぼしき研究者らしき方からは「解説がなくてわからない」といったご意見が多く、感性的な展示を楽しむための補助ツールや事前説明の必要性を感じました。

今回の企画には、学内外からたくさんの皆さんがお越し下さいました。年配の工学部の卒業生の方や元技官の方がなつ

かしそうにされているのを見て、公開してよかったとつくづく思いました。また、工作機械関連の会社の方々も多数お見えになり、今後、九州における歴史的工作機械のアーカイブへと発展しそうです。

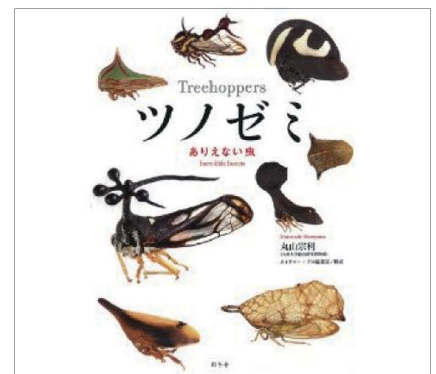
展示期間終了後、6月5日には、日本ミュージアムマネジメント学会年次大会のエクスカージョンで大学博物館ツアーがあり、当日40名ほどの会員の方にもご覧いただきました。砂地のカフェコーナーでおくつろぎいただくこともでき、ミュージアムプロパーの方々にもご堪能いただけた様子でした。

たった8日間と短い期間でしたが、会場までお越し下さったみなさま、大雨の中にも関わらずお越し下さったみなさま、遠路はるばるかけて下さったみなさま、催事を一緒に作って手伝って下さったみなさま、本当にありがとうございました。今回の展示での出会いと気づきを、今後も大切にしていきます。第一分館倉庫での挑戦、これからもご声援をお願いします。



丸山 宗利 助教著 「ツノゼミ ありえない虫」 祝発売!!

おもしろい虫の見せ方は、
『MUSHI ATSUI』の
企画に携わった学生さんにも
アイデアを出して
もらっています。現在、
店頭で好評発売中です。



「ちいさな貝のメロディ」

九州大学総合研究博物館巡回展／
糸島市立志摩歴史資料館夏季企画展／
木下・貝の資料館収蔵品展

担当：松隈 明彦 分析技術開発系・教授

平成23年7月16日(土)～9月4日(日)、
糸島市立志摩歴史資料館企画展示室にお
いて、九州大学が所蔵する760万点を超
える標本、および木下・貝の資料館(唐津
市)の標本の中から、現生および化石貝類
の標本を一般公開しました。来館者、特に

小学生が、自然科学への興味を抱くよ
うになることを目指しました。体験コー
ナーでは、貝がらを使った遊び(貝合わせ)
をしたり、貝がらを耳に当てて潮の音を
聞くことができ、飼育槽(水槽)では、外国
から入ってきたオオクビキ
レガイやスクミリングガイ
(ジャンボタニシ)を飼育展
示しました。また、7月16日
(土)には石橋毅先生(元九
州大学理学部)が「アンモナ
イトのレプリカづくり」の
体験講座を開き、7月28日
には松隈(総合研究博物館)

が講演会「不思議な貝の物語ー一体の作り
と生態」を行いました。多くの方が展示を
見たり、体験講座や講演会に参加して、貝
の美しさや面白さを楽しみ、不思議を発
見することができたことでしょう。



写真右上:
世界のめずらしい
貝コーナー、
右下:貝合わせ

「MUSHI ATSUIー小さな虫たちの色と形の美術展ー」

担当：丸山 宗利 開示研究系・助教

今年も、当館に収蔵されている豊富な
昆虫標本を皆さんにご覧いただくこと、
昨年の「ツノゼミの世界」に続き、昆虫の
展示を行いました。今回は、農学研究院、
統合新領域学府、芸術工学部などの学生
の企画運営で、昆虫の美しさに焦点を当

てた展示となりました。タイトルは「蒸し
暑い」開催期間と学生さんたちの虫への
情熱「虫(が)熱い」をかけたものです。幸
い(?)タイトル通り今年は夏らしい夏と
なり、また学生さんたちの情熱と工夫で
独自性の高い美しい展示会場を作ること
もでき、7月25日から8月
14日まで旧工学部本館3階
3階の旧工学部図書室で行
った展示では1000名(概
算)を超える来場者があり
ました。その後、博物館常設

展示室に場所を移して開催期間を延長し、
9月7日まで多くの来場者を迎えました。
蒸し暑いなか足をお運びくださった皆さん、
どうもありがとうございました。来年も
何か他とは違った昆虫の展示をしようと
思っています。どうぞご期待ください。



「100年昔の世界旅行ー父が子にあてた絵はがき」

担当：中西 哲也 分析技術開発系・准教授

九州大学の百周年にあわせ、明治～大正
時代の教育家で、学習院大学の教授であ
った真崎誠氏が世界一周旅行の旅先から

息子と妹へ宛てた絵はがきの展示を開催
しました。100点を超える絵はがきは福岡
市在住の池谷明美氏、山本睦子氏のコレ
クションを合わせたもので、山本氏は真
崎氏の妹の孫にあたります。
絵はがきからは、現代の情報化社会の中
では触れ難い文字の暖かみと100年前
の風景が伝わり、来場者

を時間旅行へと誘いました。8月6日には、
フランス人形の絵はがきにちなみ、フラン
スからの留学生クララさんによるヴァイ
オリンのミニコンサートが開かれました。



New Assistant Professor

新助教着任

舟橋 京子

Kyoko Funahashi

開示研究系・助教



私はこの5月に助教に就任しました。2004年九州大学比較社会文化研究院を単位取得退学後、2005年に博士号を取得し、2005年以降九州大学で学術研究員・学振特別研究員(PD・RPD)としてアジア地域を対象とした拔牙風習の研究に従事してきました。ご挨拶代わりに少しでも拔牙風習の話を紹介させていただきたいと思います。

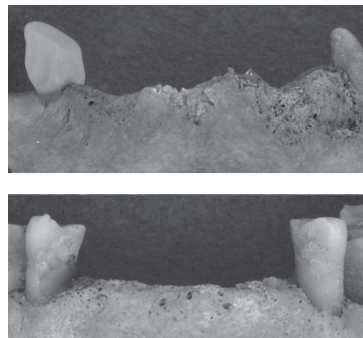
多くの社会には人の人生という一続きの時間を複数の段階に区切るという考え方があります。簡単な例では、「オトナ」と「コドモ」です。この人生の異なる段階への移行の際に必要なとされるのが「通過儀礼」であり、民族事例などから、「重要視される儀礼」「儀礼の際に強調される社会集団」は社会により異なると予測されます。この観点から私は、古人骨にみられる拔牙風習を主な対象として分析を行いました。その結果、①縄文時代後期に東日本から西日本に拔牙風習の情報が伝播する際意味変容が起きている点、②縄文時代の晩期と弥生時代の前期では文化・生業が

変わっていても成人儀礼における拔牙風習の使用には変化がみられない点、③アジア地域では実年代と関係なく社会の変容期に成人儀礼時の拔牙風習が衰退している点等を明らかにし、通過儀礼と社会組織の時間的・空間的変容が密接に結びついていることを指摘しました。

これからも人骨そのものや人骨の出土情報から通過儀礼の研究を行い、先史社会復元を行いたいと考えています。また、博物館業務では古人骨資料・骨格標本を中心とし、資料・標本・その研究成果の展示方法について色々な試みができればと考えております。どうぞよろしくお願いたします。



古人骨発掘現場の様子
(大分県旧直入町の長湯横穴墓にて)



上：歯周疾患の疑いのあるAMTL(生前歯牙喪失)、
下：拔牙風習によるAMTL

(舟橋京子2010「拔牙風習と社会集団」すいれん舎より)



舟橋助教の博士論文でもある力作、「拔牙風習と社会集団」。縄文・弥生時代の日本各地の拔牙人骨の他、東アジア地域も含めた実証的研究の集大成。拔牙風習の実態を丁寧な実証をもとに解明しています。

Event Information

催事予告

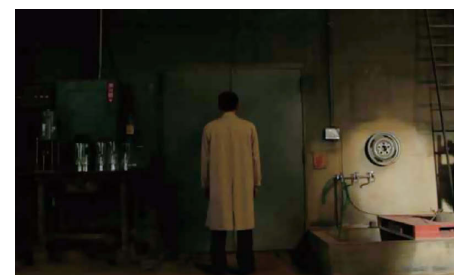
キヲクノトビラ

Coming Soon!

九州大学創立百周年記念・九州大学総合研究博物館特別企画月間
平成23年10月～12月

詳しくは、九大博物館のホームページへ！

ウェブサイト <http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/>
ツイッター http://twitter.com/#!/Kyudai_Museum



Series : Museum Jobs from A to Z

シリーズ・大学博物館のお仕事紹介

大学博物館では、公立・私立の博物館と同じような業務や、大学博物館ならではの業務があります。前回からシリーズで、大学博物館のお仕事紹介をしています。

展示・教育普及その1 :

展示パネル作り

福原 美恵子 総合研究博物館・研究支援推進員

「展示パネル」は、見る人の展示物への理解を深め、また展示会場の雰囲気を作り上げる重要なアイテムです。総合研究博物館では、年間100枚以上の展示パネルのほぼすべてを自作しています。

パネルの内容は、見る人に見やすく、正確で簡潔に内容を伝えるために、本博物館教職員はもちろん、九州大学教員、学生、デザイナー等、協力いただいています。時には、キャラクターのデザインなども行います。内容とレイアウトを打ち合わせた後、文章、図表、写真や絵をパソコン上で組み合わせ、文字の大きさを決め、ルビ(ふりがな)を打ち、パネルとして作り込んでゆきます。

展示パネルは離れてもよく見えるようにA3以上の大きさに印刷することが多く、

通常の事務用プリンターでは印刷できないため、専用の大型プリンターが必要になります。大型プリンターは博物館設立当時から大活躍し、立て看板用の印刷物や、5mを超える横断幕なども印刷することができます。

印刷の終わった用紙は、しわが寄らないように気をつけながら、のりのついた発泡スチロールボードに貼り付け、余白を切り取って、板状の「展示パネル」に加工します。イーゼルや掲示板に設置して完成です。



1) 文章や絵を用意します。



2) パソコン上で文章と図を組み合わせ完成後、大型プリンターで印刷します。



3) 印刷した用紙をパネルに手作業で貼ります。



4) 展示場に設置します。写真は、2011年3月博物館フォーラムと同時開催された展示



次号予告: 「標本・資料の収集・管理その2」をお送りします。

mini Report

ミニレポート

旧工学部本館3階廊下でのパネル展示

中牟田 義博 一次資料研究系・准教授

これまで常設展示室で展示していた九州大学所蔵標本の紹介パネルを、常設展示室と同じ階の廊下で行うことになりました。

この階には九州大学全学共通で利用する第一会議室や第10講義室、鉱石資料を収蔵した工学部列品室などがあり、人目に付

きやすい位置となっています。展示パネルもリニューアルし、廊下壁面にピクチャーレールを新たに設置して展示しています。



Series : Research at

シリーズ・九大博物館での研究の紹介 —2—

No15から始まった研究紹介シリーズでは、まずは科研費による研究を紹介しています。

科学研究費補助金による研究:その3

「生産遺跡における製錬スラグの科学的分析と体系化に関する研究」

研究代表者: 中西 哲也 専門: 鉱床学



復元した堅型炉による銅製錬実験の様子



からみ口から流れ出す製錬滓



炉底に残った金属塊。温度が高すぎて大量の金属鉄(白色)が生じている。赤色の部分が銅で黒色は木炭。

この研究は、奈良時代の古代銅製錬に挑むものとして、ここ数年継続してきている研究です。

山口県美祢市美東町に位置する長登銅山は、聖武天皇による奈良の大仏建立の際に使用された銅の供給地として知られています。2003年には「長登銅山跡」として国指定史跡となりました。

秋吉台石灰岩の東の端に位置する長登では、貫入した花の山花崗岩が石灰岩と反応し“スカルン鉱床”と呼ばれる接触交代鉱床を生じています。古代の銅鉱石は、初成の黄銅鉱が風化して生じる孔雀石(炭酸銅)や褐鉄鉱(水酸化鉄)を主体とする酸化銅鉱であり、現在も榎ヶ葉(かやがは)山の山頂付近の北側斜面で採取する

事ができます。

美東町では、2001年より教育委員会と地元の有志により堅型炉を用いた古代銅製錬復元実験を年に一回行ってきました。原料はチリから輸入した酸化銅鉱や榎ヶ葉山で採取した含銅褐鉄鉱を粉碎したものを団子状に固め、燃料は木炭を使用します。送風はたたら製鉄を模した足踏みフイゴを6人掛かりで踏み、銅製錬に必要な1250度の温度を達成します(写真左)。銅原料の孔雀石は木炭から生じた一酸化炭素により還元されて金属銅となり炉の底に溜まります。鉱石中の鉄分は酸化鉄(ウスタイト)炉壁の珪酸分と反応して鉄かんらん石(ファヤライト)になり製錬滓(スラグ)として溶融します。

スラグは製錬反応の進行に伴い、定期的に炉底上部の“からみ口”と呼ばれる排出口から炉外に流出させます(写真中)。

銅製錬が成功するかどうかは、いかにサラサラの粘性の低いスラグを作り、銅分との分離を上手く行うかにかかっています。その為には鉱石の組成を予め分析しておき、適宜鉄分を加える等スラグの組成を一定の範囲に保つ必要があります。また、温度を上げすぎると鉄の還元反応が起こり、炉内に金属鉄が大量に生じるので温度調節も重要です(写真右)。理屈は分かっているが実際の製錬反応を制御するためには経験が必要であり、2009年の製錬実験でようやくまとまった量の銅塊を得る事ができました。

長登銅山では2009年に長登銅山文化交流館がオープンし、発掘調査の成果や、銅製錬関連の遺物、製錬実験の生成物等に最新の研究成果を加え、古代の銅生産技術についてわかりやすく展示しています。

(基盤研究C、平成21年度～平成23年度)

長登銅山文化交流館

月曜休館日 / 9:00-17:00 / 大人300円、小中学生150円

山口県美祢市美東町長登610番 / Tel 08396-2-0055 / Fax 08396-2-0055

長登銅山は、日本最古の銅山跡と言われています。長登銅山文化交流館には、発掘調査で出土した土器や鉱石、木筒等が展示されています。今年の「古代銅製錬復元

実験」は、平成23年10月30日(日)、「第4回銅山まつり」のメインイベントとして、朝8:30から始まります。

ホームページ: <http://www.c-able.ne.jp/~naganobo/>より →



the Kyusyu University Museum vol.2

科学研究費補助金による研究:その4

「常緑照葉樹を寄主とするゴール形成昆虫(タマバエ類・タマバチ類)の適応放散の起源」

研究代表者: 三島 美佐子 専門:植物系統学

虫こぶ(ゴール)は、昆虫が植物を操作して作る、本来その植物ではみられない形をした、昆虫のための「棲み家(すみか)」です。ゴールを作る昆虫の代表的なものに、タマバエ類やタマバチ類があります。これらゴール形成昆虫は多様性が高く、それが適応放散(*)によるものでないかと考えられてきています。

これまでゴール形成昆虫の適応放散については、昆虫がゴール形成性を獲得する事によって、より過酷な環境(=乾燥地帯)へ進出・適応できるようになったさい生じたのであろうと考えられてきました。しかしそのもとになっている研究は、新大陸などの中緯度乾燥地帯での研究がほとんどです。湯川教授(現九州大学名誉教授)を中心とするこれまでの研究からは、アジアの熱帯雨林や季節林などの湿潤な地域では、新大陸の乾燥地帯などと比べて相対的に、ゴール形成昆虫のより高次の分類群(属や科、目)の多様性が高いというデータを得ており(Yukawa et al. 2001)、中緯度乾燥地帯とアジアの比較的湿潤な地域という2つの異なる環境においては、それぞれ異なる適応放散メカニズムによってゴール形成昆虫が多様化したのではないかと考えられます。

*適応放散とは、厳密には、あるひとつの生物群が、他の生物群に利用されていない生息環境に適応しながら、様々な群にくりかえし分化することをいいます。

そこでこの研究では、アジアの比較的湿潤な地域でどのような適応放散のメカニズムが考えられるかを明らかにするため、アジアに広く分布する常緑樹に注目し、ゴール形成昆虫が適応放散したと考えられる特定植物種群を中心に、まずはタマバエ類・タマバチ類の昆虫相、および寄主植物とその近縁種群の植物相を明らかにすることを目的としています。調査は、常緑樹の分布域の西端域にあたり、かつ、これまで研究事例がほとんどない、インドのアッサム地方から始めています。

インドは生物多様性保全に関する意識が非常に高く、とてもしっかりした(つまり厳しい)国内法を整備しています。インド国内では、インド側の研究者の同伴なしには生物の採集ができないことになっていますので、この調査も、アッサム地方にある「北東科学技術研究所(NEIST)」という国立研究機関との共同研究によって実施しています。それでも様々な制度

上の困難により、当初の予定に反して、これまで実施してきた3回の渡航調査で採集した標本はいまだ日本へ持ち出すことができずに、インド現地での分析を余儀なくされています。この3年間で、タマバエ・タマバチのいずれでも多数の新種が見いだされていますが、全てを記載し、寄主植物を含めたDNA解析を完了するには、まだまだ時間がかかりそうです。

アッサム地方自体は、山間部を省けば、比較的治安はよいところです。数十年程前までは、見知らぬ旅人が家に訪れてきても泊めさせてあげるような、牧歌的なところだったそうです。中国やミャンマーとの国境に近いこともあり、われわれ日本人と見まがうようなアジア系の容姿の人たちが多く、いかにもインド人らしい容姿の人たちと混在しています。食材、特に野菜類はあまり日本かわるところがなく、カレー味も比較的マイルドでした。

(基盤B海外学術研究 平成21年度~平成23年度)



研究所内にあるゲストハウスの食事。なかなかおいしかったです。滞在中、ほとんどメニューが変わりません。初回の渡航は11月の祭り(ビフー)に重なり、その日は五穀豊穰を願う祭り食が出ました。



荷物運びで車道を歩くゾウ。インドといえばゾウ。国立公園の林の中には、座布団ぐらいの大きさのゾウのふんがたくさんありました。とはいえ、このように歩いているゾウは、思っていたほど見かけませんでした。



コナラ属の一種に作られたタマバチのゴール。このゴールの発見シーンは、2011年1月発行「九大広報」で、共同研究者である阿部芳久先生(比文)と大学院生の井手達也君へのインタビュー記事に掲載されています。

次号予告:

次号では、その5で三島准教授の骨格標本デジタル化研究、その6で舟橋助教の抜歯儀礼に関する研究をご紹介します。

Personnel Changes

人事異動

着任



竹田 仰 新館長

平成23年4月1日付で、
松崎康司が特定有期事務職員として着任しました。

平成23年4月1日付で、
竹田仰芸術工学研究院教授が館長として着任しました。

平成23年5月16日付で、
舟橋京子が助教として着任しました(本誌p.5参照)

Activities of Exhibitions & Conference

公開講演会

- 「九州大学創立百周年記念公開講演会・総合研究博物館創立十周年記念フォーラム
どうする、どうなる!? 九大の標本資産-これからの博物館と運営のあり方-」
平成23年3月25日
場所: 箱崎キャンパス旧工学部本館3階第一会議室

九大創立百周年記念特別企画

- 「Breathing」(p2.報告記事参照)
平成23年5月22日～5月29日
場所: 箱崎キャンパス総合研究博物館第一分館倉庫

特別展示

- 「九博紹介特別展示」
平成23年3月25日～31日
場所: 箱崎キャンパス旧工学部本館3階旧工学部図書室
- 「九州大学教育研究の最前線-第9回P&P研究成果一般公開-」
平成22年5月10日～6月11日(5月23日休館)
場所: 箱崎キャンパス旧工学部本館3階
- 「MUSHI ATSUI-小さな虫たちの色と形の実験展-」
平成23年7月25日～8月14日
場所: 箱崎キャンパス旧工学部本館3階旧工学部図書室
- 「100年昔の世界旅行-父が子にあてた絵はがき」
平成23年7月28日～8月11日
場所: 箱崎キャンパス旧工学部本館3階博物館常設展示室

展示・講演会関係の活動状況

巡回展示

- 「ちいさな貝のメロディ」
糸島市立志摩歴史資料館夏季企画展/木下・貝の資料館収蔵品展合同
平成23年7月16日(土)～9月4日
場所: 糸島市立志摩歴史資料館企画展示室

催事予告

開催が近づいてまいりました!

九州大学創立百周年記念
九州大学総合研究博物館平成23年度公開展示
/九州国立博物館トピック展示

「九州大学百年の宝物」



平成23年11月15日～12月18日
場所: 九州国立博物館(太宰府市石坂4-7-2)
1F エントランス・ミュージアムホール(自然系)
2F 文化交流展示室 関連第11室(人文系)
※1F展示は入場無料。
2F文化交流展示室の展示には、入館料が必要です。

運営委員会

平成22年 4月26日(書面回議)
平成22年 5月18日
平成22年 6月14日(書面回議)
平成22年 9月16日(書面回議)
平成22年10月 7日(書面回議)
平成22年11月 4日

平成22年12月17日(書面回議)
平成23年 1月28日
平成23年 2月 4日(書面回議)
平成23年 4月14日
平成23年 6月 6日

団体見学

平成23年 2月25日 笠松小学校6年生
平成23年 4月 4日 第1回全学FD(新任教員の研修)
平成23年 4月22日 箱崎地区まち歩き会
平成23年 5月28日 筑紫女学園大学
平成23年 6月 5日 ミュージアムマネジメント学会
平成23年 7月19日 九州大学福岡同窓会

平成23年 7月26日 社会教育主事講習会
平成23年 7月29日 九州高等学校理科教育研究会
平成23年 7月30日 日中韓交流による訪日学生
平成23年 8月 8日 私立松山聖陵高校(愛媛県)
平成23年 8月20日～21日 MAT fukuoka近現代建築ツアー
平成23年 9月13日 古賀東中学校